

国立病院機構熊本医療センター

No.210



くまびょうNEWS

NHO KUMAMOTO MEDICAL CENTER KUMABYO NEWS

発行所
国立病院機構熊本医療センター
〒860-0008
熊本市中央区二の丸1番5号
TEL (096) 353-6501(代)
FAX (096) 325-2519



熊本市災害医療福祉訓練が行なわれました

10月25日に熊本市災害医療福祉訓練が行われました。熊本地方を震源とするM7.3、震度6強の地震が発生し、熊本市内の道路や通信などのインフラが被害を受け、当院は停電のため非常電源作動状態となっており、エレベータ、CT、MRIなどが使用不能となった状態という想定で行われました。

職員の参集・情報収集、広域災害救急医療情報システム（EMIS）運用、傷病者受け入れ、災害用テント設営、非常食炊き出し、通訳ボランティア受け入れ、災害用カルテ運用などの多岐にわたる訓練が行われました。

今年度からは訓練者はだれからでも職種を判別できるビブスを着用したり、訓練者の役割分担をその場で決定したり、臨時調剤所を設置したり、人工呼吸器を

階段で運搬したり、より実災害時を想定した内容の訓練が行われ、参加職員らも真剣に取り組み、大変有意義な訓練を行うことができました。

今年度の反省点を踏まえて、今後の災害対策強化をさらに図っていきます。（救命救急科医長 原田正公）



基本理念

最新の知識・医療技術と礼節をもって、
良質で安全な医療を目指します。

運営方針

1. 良質で安全な医療の提供
2. 政策医療の推進
3. 医療連携と救急医療の推進
4. 教育・研修・臨床研究の推進
5. 国際医療協力の推進
6. 健全経営

患者様の権利

1. 良質かつ適切な医療を公平にうける権利があります
2. ご自身の医療について理解しやすい言葉と方法で十分な説明と情報を受ける権利があります
3. 病院から説明と情報を得た上で、自らの意志で治療を受け、あるいは選択し、拒否する権利があります
4. 自分の診療記録の開示を求める権利があります
5. セカンド・オピニオンを求める権利があります
6. 個人としての人格の尊重とプライバシーの保護を受ける権利があります



「わが青春の国立熊本病院」

さくら通りクリニック 院長 西山 敏彦



平成20年5月よりサンリブくまなん近くで開院しておりますさくら通りクリニック院長の西山敏彦です。熊本大学医学部昭和63年卒で代謝内科出身です。熊本医療センターには常日頃、高度なまた専門的な治療が必要な患者でお世話になっております。今日はこの紙面をお借りしてお礼申し上げます。この原稿では随分昔のお話ですが、私と熊本医療センターの出会いについてお話したいと思います。

開業して2年目くらいでしょうか共同指導の患者がいて、貴院を訪れた際にあまりの建物の立派さに

腰を抜かしてしまうところでした。その当時駐車場の反対側には旧病棟の建物がまだ残っていたように記憶しておりますが、実は今から遡ること25年前に私は研修医2年目としてその病棟に足を踏み入れたのでした。当時は今のような研修制度はなく、それぞれの科で先輩医師にご指導を頂く方式で、受け持つ患者も種々多様でした。血液内科は紫藤先生、河野先生、佐藤先生を始め多くの先生方に、消化器内科は木村先生、前田先生、小畑先生、呼吸器内科は松村先生、内分泌内科は東先生、外科を始め他科の先生方にもご指導、たまにはご叱責を頂き、充実した研修を受けることが出来ました。見る事やる事全て初めてのことで、最初の頃はDIC患者に対する点滴指示が余りにもひどく河野先生直々の教育的指導があったりもしました（先生に頂いたメモは今でも大切に持っています）。国立での1年間の研修が現在の医師としての自分の基礎になっていると言っても過言ではないと思います。また一方で当時の研修医の部屋は第2医局と呼ばれており、同期の先生で福田道広先生、大浦敬子先生、中村佳代子先生達には大変お世話になり、とても楽しい時間を過ごさせて頂きました。中でも福田道広先生にはまるでオーバンの様に手取り足取り指導頂き、大変感謝しております。週1ペースで病院に泊まるほど忙しい日々でしたが、大変充実した日々であったと思います。ほろ苦い思い出もありますが、私を育てて下さった国立熊本病院（現 国立病院機構 熊本医療センター）の益々のご発展をお祈りいたします。

第20回 国立病院機構熊本医療センター医学会の開催と演題募集のご案内

第20回国立病院機構熊本医療センター医学会が2015年1月17日（土）に国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センターにて開催されます。

例年通り病院全体の職種が参加し発表します。

開放型病院登録医の先生方にも是非ご発表頂きたく演題募集をさせていただきます。

応募方法は演題抄録をCD-RまたはUSBメモリーに入れて下記宛てにご送付頂くか、e-mailにてご送信下さい。多数のご参加をお待ち致しております。

抄録提出締切日：2014年12月5日（金）

- 抄録の文字数は全体（演題名、所属、発表者、共同演者、本文）で600字以内にしてください。
- 本文は【目的】【方法】【結果】【総括】、症例報告は【目的】【症例】【経過】【考察】にそって記述して下さい。
- 図表の使用はできません。半角カナは使用できません。
- 尚、発表は原則としてPCで、使用ソフトはパワーポイントで作成したものに限りです。
- 発表時間は6分、討論3分です。
- 参加費は無料です。

お問い合わせ・送付先：〒860-0008 熊本市中央区二の丸1-5

国立病院機構熊本医療センター医学会実行委員 臨床研究部長 芳賀克夫

TEL：096-353-6501 FAX：096-325-2519 E-mail:scott@kumamed.jp

病棟紹介

6 北病棟



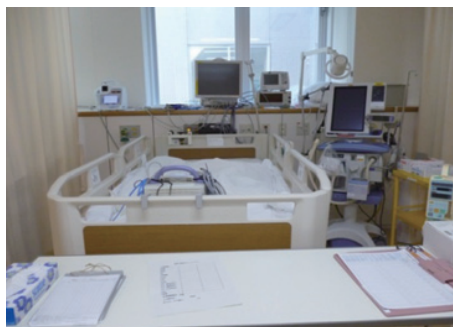
CCU・6北病棟スタッフ

6階北病棟は、循環器内科と心臓血管外科の一般病棟とCCU 4床を併設する「心臓血管外科センター」としての役割を持ち、6割が循環器内科・心臓血管外科であり、急性期から亜急性期までの治療・看護を行っています。主な疾患は心筋梗塞、狭心症、心不全、大動脈解離が最も多く、それに伴う心臓カテーテル検査、PCI治療と心臓血管バイパス術、各種血管外科手術が行われ、周術期看護から退院に向けたリハビリまで積極的に行っています。平成25年度は、循環器内科392名、心臓血管外科74名、その他の診療科557名の入院患者を受け入れ、心臓カテーテル検査539例、予定PCIは114例、緊急PCIは144例、心臓血管手術はCABGや弁置換術、動脈瘤解離など71例の手術を行なっています。6北病棟とCCUは常に連携を図りながら、共に学び成長する環境を重視し、チームワークと笑顔で日々の看護を提供しています。

(6北病棟師長 森山ひろみ)



CCU



心外術後受入れ準備



モニターチェック



心臓カテーテル治療風景



CCU・6北病棟スタッフ

2014
診療科紹介 (77)
腎臓内科
(腎センター)



部長
富田 正郎 (とみた まさお)
 腎臓救急、各種血液浄化、急性腎不全、慢性腎臓病 (CKD)
 日本内科学会指導医
 日本内科学会総合内科専門医
 日本腎臓学会専門医；指導医
 日本透析医学会専門医・指導医
 日本高血圧学会指導医
 熊本大学医学部臨床教授



医長
梶原 健吾 (かじわら けんご)
 腎臓内科 (血尿・蛋白尿・腎炎・ネフローゼ・腎不全・慢性腎臓病 (CKD))、血液浄化、シャント管理、腹膜透析
 日本内科学会認定医・指導医
 日本腎臓学会専門医
 日本透析医学会専門医
 日本高血圧学会指導医

診療の内容と特色

当院が精神神経科を含めたすべての診療科を備えている救急病院のため、あらゆる合併症を持つ透析患者の急患を常時受け入れています。緊急を要する症例についてはオンコール制をとっており、緊急透析業務は365日、24時間体制で対応しております。急性腎炎、慢性腎炎、ネフローゼ症候群、急速進行性腎炎症候群、急性腎不全、保存期慢性腎不全に対しても迅速な対応が可能です。腎生検検査も原則として3日間入院のみで検査可能です。

日本腎臓学会研修施設、日本透析医学会、日本高血圧学会の認定施設。

症例数・治療・成績

平成25年度

【透析】

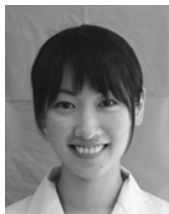
血液透析	5,497件
腹膜透析患者	12名
新規導入透析患者数	82名
急性腎不全透析患者 (離脱) 数	26名

【その他の血液浄化】

持続的血液濾過透析 (CHDF)	58回
------------------	-----



医師
坂梨 綾 (さかなし あや)
 腎臓内科 (血尿・蛋白尿・腎炎・ネフローゼ・腎不全・慢性腎臓病 (CKD))、血液浄化、シャント管理、腹膜透析
 日本内科学会内科認定医



医師
三浦 玲 (みうら れい)
 腎臓内科、血液浄化、腹膜透析、シャント管理
 日本内科学会内科認定医

PMX	31回
LCAP	82回
GCAP	23回
PE	34回
DHP	9回

【手術件数】	232件
内シャント作成術	115件
人工血管グラフト内シャント術	64件
上腕動脈表在化術	4件
大伏在静脈グラフト内シャント作成術	5件
感染グラフト抜去術	15件
シャントデクロティング術	9件
シャント結紮術	6件
CAPDカテーテル挿入術	7件
同出口部作成術	3件
同抜去術	3件
【血管造影件数】	208件
シャント造影	52件
シャントPTA	156件
【腎生検】	41件

医療設備

同時透析 20 台、CHDF機器 5 台、血漿交換機器 1 台

ご案内

新病院では透析病床は大幅に増床 (10 床→20 床) され、CAPD室も確保され、一層の機能充実が図られております。腎臓病を通じて熊本地区の地域医療にさらに貢献してゆきたいと存じます。CKD (慢性腎臓病) 対策においても専門医の立場から積極的に取り組み、透析導入になる患者様が 1 人でも減るように努力して参ります。また、腹膜透析にも力を入れ、「PDファースト」という、最も長命が期待できる治療戦略を取り入れます。すなわち、透析が必要な状態になった場合に、初めから血液透析を行うのではなく、腹膜透析を先に行った後 5 年経過したら血液透析にスイッチする、という方法で、御自身の残腎機能が減りにくい (つまり、透析になっても尿量が減りにくい) という特長があります。

熊病の歴史

消化器内科 (2)

1975年木村圭志先生が着任されます。木村先生は、消化器病としては消化管のみならず肝臓病にも造詣が深く、漢方薬による肝臓病治療法は当時としては珍しく、1985年着任されたばかりの蟻田功院長の目に留まります。1987年に赴任した小畑伸一郎先生は精力的に消化器内視鏡検査・治療を展開するとともに、木村院長と消化器病の漢方治療を発展させました。この頃には、木村院長、前田院長、小畑先生の3名からなる内科一消化器部門は事実上内科から独立し、レジデントが所属するようになりました。1993年院長を継承された宮崎久義院長は、『消化器科』を1996年正式に内科から独立させ、消化器科医長として木村圭志副院長(1996年に就任)が併任されました。消化器内視鏡検査・治療は小畑先生の異動により、後任の加茂章二郎先生が引き継がれました。1997年超音波診断室が独立し、初代室長を水谷純一外科医長が務められました。その後、杉、大堂雅晴外科医長、中田成紀医長へと引き継がれています。超音波は診断のみならず、臓器生検、肝がん治療や胆道ドレナージの支援に大きな役割を果たし、検査室の拡充とともに機器も充実し、この間生理検査技師の育成も行われました。

1999年宮崎院長は病院全体を挙げてのセンター化構想を具現化し、『消化器病センター』が構築されました。加えて、これまで診療実績統計が消化器科としては外来患者のみでしたが、入院患者も内科から独立して統計に加えられることになり、この年から消化器科のアイデンティティが確立しました。本センターは消化器科外来、超音波診断室、内視鏡室の各部門で構成され、15年後の現在に至ります。前田院長が初代内視鏡室長となり2012年まで務められ、尾上公浩医長へ引き継がれます。発足当時は内科、外科、放射線科が協力して検査・治療を担当し、その後次第に内科だけでの運営となりますが、3科の院内連携は今日まで継続しています。2009年9月新病院移転に伴い、池井聰院長の命により消化器病センターの名称はそのままに『消化器科』は『消化器内科』と標榜を変更しました。病棟は旧病院別3病棟から新病院7階西病棟へと移りました。消化器病センターは今年で15年目を迎えます。

肝臓病に関しては、1964年(昭和39年) Prof. Blumbergらによるオーストラリア抗原(後のHBs抗原)の発見、1968年大河内一雄先生による肝炎との関連の報告以降、急速にウイルス肝炎の解明と治療が発展してきます。日本肝臓学会は

1965年に設立され、今年で50年を迎えます。1989年にC型肝炎が発見されました。これと前後して、当院では国際医療協力事業として1988年に発展途上国に対するJICA集団研修コース『血液由来感染症 - HIV・ATL・B型肝炎』がスタートし、1998年から『ウイルス肝炎対策コース』に分かれました。2003年よりコースリーダーは木村副院長から杉へと引き継がれ、現在なお多くの参加国にインパクトを与えています。

1992年から保険診療で治療が可能となったC型慢性肝炎に対するインターフェロン治療、肝細胞癌に対するエタノール注入療法、食道静脈瘤に対する内視鏡的硬化療法など、これまでの消化管疾患に加え肝疾患診療が充実してきました。1998年、これまで熊本大学第二内科出身で占められていた消化器科に、熊本大学では肝臓内科の歴史がある第三内科から当時の富田公夫教授の人事により中園光一先生が赴任し、さらに2001年に杉が加わりRFA(ラジオ波焼灼療法)の導入をはじめ肝臓病を中心とした診療が発展します。2003年に中園先生後任として中田成紀先生が加わり、第二内科と第三内科出身医師が協力して診療することになります。中田先生は前田院長とともにPEG(内視鏡的胃瘻造設術)と栄養療法に取り組みました。同年消化器科科長は木村副院長から杉が引き継ぎました。これまでの医局制度の枠を取り払った事実上の消化器内科が出来上がりました。以後、全国の国立病院機構肝疾患ネットワークへの参加、多施設共同研究、地域医療連携、患者啓発活動など診療以外への広がりを見せています。

消化器内科部長、消化器病センター長

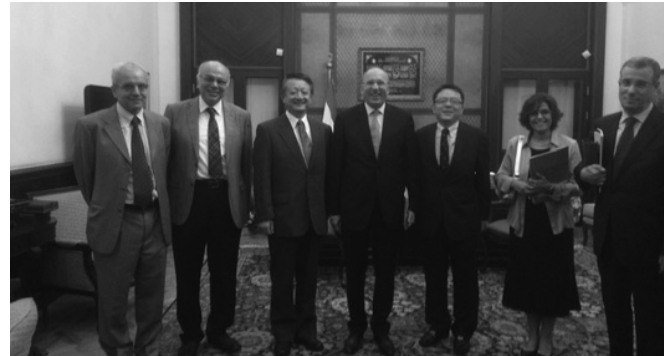
杉 和洋



2014年5月9日 消化器病センターにてスタッフ一同

熊本医療センターとスエズ運河大学医学部の 合同ワークショップを開催しました

河野院長にお供して、熊本医療センター研修とスエズ運河大学研修の合同ワークショップを開催するため、エジプト・アラブ共和国のカイロを訪問しました（平成26年10月12日～平成26年10月23日）。丁度、世界で最もHCV感染者の多い国として、その治療と予防に取り組むための国家プロジェクト（肝炎対策アクションプラン）を開始する日にあたり、このため保健省を訪問して大臣に会い、一緒に記者会見に臨みました。またプロジェクトの中心施設である国立肝臓・熱帯医学研究所（NHTMRI）や国立輸血センター（血液バンク）視察しました。JICAの援助により建てられたカイロ大学小児病院（CUSPH）では病院増設が進められ、エジプトの子供たちを救う医療の発展を肌で感じることができました。



エジプト保健省大臣との面談

ワークショップは大成功でした。日本とエジプト両国の研修員から選抜されたこともあり、活発な質疑応答を通じ、HIV/AIDS、肝炎など感染症に対するアフリカ各国の官民一体となった取組みについて理解し、そこの携る元研修員達の貢献を確認することができました。

今回、特に、熊本医療センター研修に参加したDr. Ahmed El-Goharyが河野院長との共同研究により明らかにしたエジプトのC型肝炎ウイルス感染が高率であるとの報告から、20年を経て、エジプト全国を挙げて開始されるその治療プロジェクトの始まりに立ち会うことができたのは、とても感慨深いものでした。

（臨床検査科長 武本重毅）

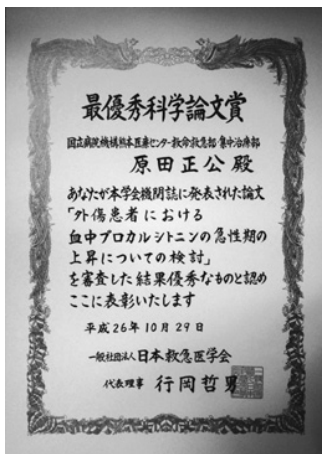


写真上：ワークショップ参加者と一緒に記念撮影

写真左：国立肝臓・熱帯医学研究所（NHTMRI）にて

原田正公救命救急科医長が 平成26年度「日本救急医学会最優秀科学論文賞」を受賞しました

この度、当院の原田正公医長が平成26年度「日本救急医学会最優秀科学論文賞」を受賞しました。この賞は、1年間に日本救急医学会雑誌に掲載された論文の中から一つだけ審査によって選考される大変価値ある賞です。



賞状を授与される原田正公医師

この論文は、「外傷患者における血中プロカルシトニンの急性期の上昇についての検討」というタイトルで、国立病院機構救命救急センター長協議会構成施設による多施設共同前向き研究であり、218名の外傷患者の血中プロカルシトニンを測定し、外傷の重症度と相関していることを証明し、プロカルシトニンが外傷の予後判定に有用であることを示唆した論文であります。

（副院長 高橋 毅）

「二の丸会」が開催されました

平成26年11月8日（土）にANAクラウンプラザホテル熊本ニュースカイ（旧熊本全日空ニュースカイホテル）において平成26年度二の丸会が開催されました。

総会は、蟻田 功 二の丸会会長のご挨拶から始まり、新役員の紹介が行われました。旧職員の幹事を、元看護部長の北川多恵子様にお引き受けいただきました。続いて会計報告、河野院長からの病院状況報告が行われました。



蟻田功会長のご挨拶の様子

引き続き会場を移して、村山英一様のご乾杯のご発声により、300名余りでの懇親会が始まりました。懇親会は、スタートから1時間ゆっくりとご歓談いただき、午後8時過ぎから二の丸会恒例の新人紹介を行いました。当日の出席者のうち、前回の二の丸会以降当院で勤務する事になった127名の紹介が行われました。最後に綾部明人様から閉会のご挨拶をいただき、二の丸会を無事終了することができました。

今年度の二の丸会は、例年より3週早い日程になりましたが、皆様のご理解とご協力により、300名を上回るご参加をいただきましたことを心より感謝いたします。この二の丸会は、旧職員と現職員の親睦を図るための貴重な場となっておりますが、ご出席いただいた多数の先輩方とも和やかに旧知を深めることができ、有意義な時間を過ごすことができたのではないのでしょうか。
(庶務班長 富田啓治郎)



写真左：東家監事の会計監査報告の様子

写真左下：村山英一様のご乾杯の様子

写真右下：綾部明人様のご挨拶の様子



紹介予約センター開設のご案内

この度、一般外来におけるご紹介の予約受付を便利に、また、待ち時間を短縮するための紹介予約センターを開設致しました。翌日以降の受診についてお電話でのご予約が可能です。緊急受診を要せず翌日以降の受診で良い場合、また、受診希望の診療科との特別な調整を要しない場合には、センターご利用のうえ翌日以降のご予約をお願い申し上げます。また、緊急その他の場合については、従来通り地域医療連携室までご連絡ください。

(旧)

FAX予約

地域医療連携室		
翌日以降の受診	当日の受診	その他の受診

(新)

電話予約

紹介予約センター
翌日以降の受診

FAX予約

地域医療連携室	
当日	その他の受診

① **まずはお電話を専用096-353-6565 or 6566へ**

予約日時をその場でお伝えします。(仮予約)

- 1) 電話受付時間は月～金 8:30～15:00
- 2) 以下の項目をお教え下さい。
 - ・患者様の氏名、生年月日、電話番号
 - ・お持ちの方は当院のID番号
 - ・ご希望の診療科、診察医師名、受診日時

② **当日中にFAXを専用096-353-6563へ**

予約申込書をご送信下さい。先の項目を確認します。
(本予約)

【お問い合わせ先】

紹介予約センター 096-353-6565 or 6566

○ **FAXを096-323-7601へ**

予約申込書をご送信下さい。

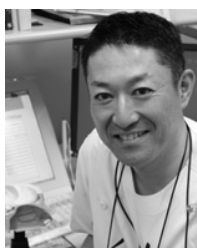
- 1) FAX受付時間は月～金 8:15～17:15
- 2) 当日受診（緊急、準緊急、その他）
- 3) 胃瘻・シャント造設のご相談等
- 4) MRI/CT予約、歯科・歯科ご相談等
- 5) 予約センターの受付時間外（15:00～）

【お問い合わせ先】

地域医療連携室 096-353-6501（内2360）

最近のトピックス

耳鼻科医のおー、 飽くなき挑戦、外科治療 ～嚥下性肺炎～



耳鼻咽喉科医長
上村 尚樹

我が国の高齢者増加に伴う嚥下性肺炎は、2011年厚生労働省の報告では、人口10万人当たりの死亡率が脳血管疾患を上回り、肺炎が第3位となりました。さらにその内訳をみると約95%が65歳以上であり、その多くが誤嚥によるものとされています。それに伴い医療費の増加も深刻化しており、嚥下性肺炎を含む嚥下障害に対する対策は、医療経済的にみても喫緊の課題です。このような医療状況を背景に、当科での嚥下性肺炎に対する飽くなき挑戦を報告します。

当院は急性期病院であり、嚥下評価はできても、長期にわたるリハビリテーションを行うことが困難な状況です。したがって当科での治療の対象となるのは、嚥下リハでも改善の得られない症例です。

[適応]

- ①リハで改善の見込まれる症例で、半年以上行ったにもかかわらず改善が得られない
- ②進行性の神経筋疾患（パーキンソン病、ALSなど）による嚥下性肺炎
これを基本に、
- ③著明な呼吸機能の低下がみられる
- ④唾液の垂れこみのために吸引等介護者および家族の負担が大きい
- ⑤経管栄養管理されている状況で、本人の経口摂取の希望が非常に強い

嚥下性肺炎を来す患者はたいてい栄養状態、および全身状態が思わしくないのがほとんどです。したがって、外科手術は低侵襲のものでなければなりません。

当科で行っている手術：喉頭閉鎖術

麻酔：全身麻酔でも局所麻酔でも可能です。（全身状態が許せば、全身麻酔で行います）

方法：

- ①甲状軟骨正中付近の軽くU字での横切開し、皮膚挙上（写真1）

写真1：皮切線



- ②前頸筋を正中で分け、下方で切断し甲状軟骨を露出し、軟骨膜を剥離

- ③正中を含む甲状軟骨翼を正中から2横指の範囲で除去、その際輪状軟骨を含む形で気管切開口とつなげる（写真2）



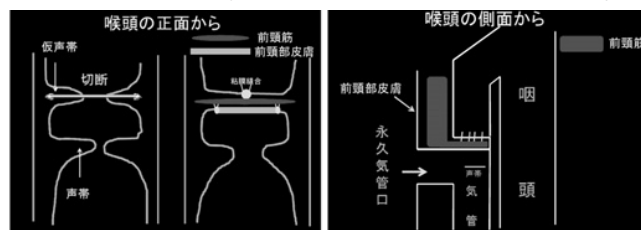
写真2：甲状軟骨、輪状軟骨の前方を切除して気管切開口とつなげたところ

- ④仮声帯のレベルで全周性に横切開
- ⑤仮声帯上唇の粘膜同士を水平方向にナイロンで順次縫合
- ⑥最初に切断した前頸筋を喉頭腔内に挿入し、喉頭の後方で粘膜と縫合
- ⑦前頸部皮膚を、さきほど挿入した前頸筋を補強、被覆するように仮声帯下唇と縫合（写真2）
- ⑧最後に甲状軟骨および気管の断端を皮膚で被覆し、手術終了（写真3）

写真3：手術終了



イメージで描くと手術原理はこのようになります。



本手術は

- ①全身状態の不良な患者さんでも局所麻酔で可能
- ②頸部進展できない、あるいは猪首の患者さんでも可能
- ③手術時間は2時間程度で、出血も少量（低侵襲）
- ④入院は14日程度

デメリット

- ①声を失う：しかしこのような手術を受ける患者さんはたいてい気管切開されており、声が出ない状況がほとんどです。
- ②気管切開部が拡大（審美性の低下）

2014年より行っています。今のところ2例と症例数は少ないですが、いずれも良好な結果が得られています。注意していただきたいのは、あくまで誤嚥防止術であり、嚥下が改善するものではありません。

しかし、術後明らかに排痰が少なくなり、看護師、介護者の負担軽減につながっています。また経口摂取できるようになるため患者さんの表情が明るくなる、などメリットのほうがはるかに大きいです。ぜひ御相談を！

いま、国立病院機構
熊本医療センターで
何が研究されているか

シリーズ90回

看護学校と臨床のユニフィケーションによる看護観カンファレンスの効果

熊本医療センター附属看護学校 石原 史絵

【目的】

看護学生と実習指導者による看護観カンファレンスの意義を明らかにすることです。

【方法】

- 1) 研究デザイン：質的帰納的研究
- 2) 対象：三年課程A看護学校3年生38名とA病院実習指導者11名
- 3) 研究期間：2011年4月～2012年12月
- 4) データ分析方法：(1)留置質問紙調査法（自記式）
(2)記載内容は、文脈毎にコード化し、カテゴリを抽出しました。

【結果・考察】

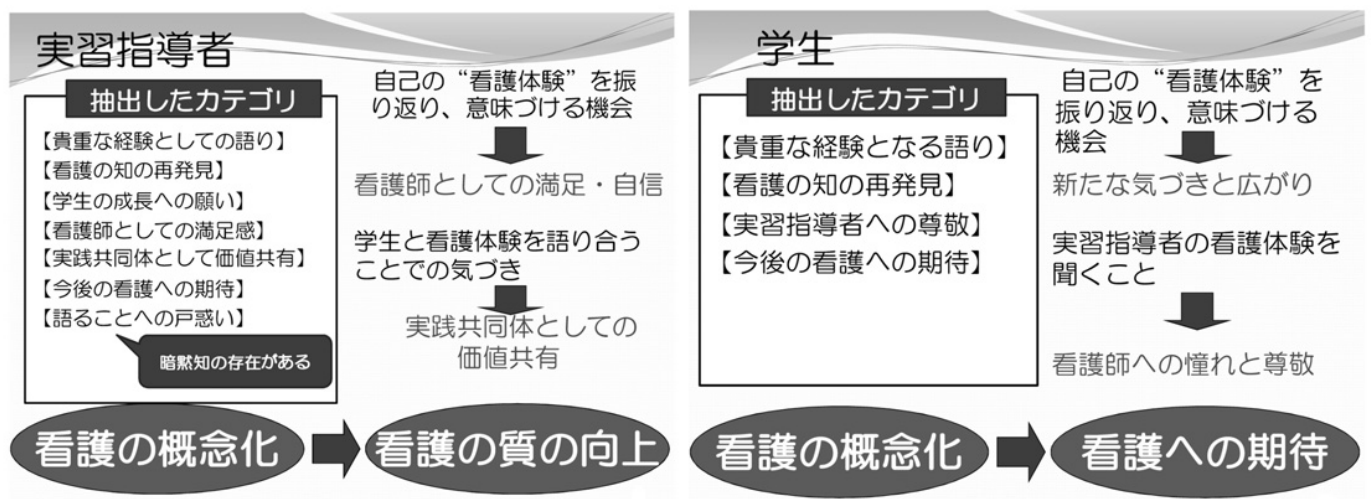
実習指導と学生の自由記載内容をカテゴリ化した結果、実習指導者からは、18のサブカテゴリから7のカテゴリが抽出されました。学生からは、16のサブカテゴリから4のカテゴリが抽出されました。両者に共通していたものは、サブカテゴリの<振り返りが順序立てて出来るよい機会>、<他者の看護観を聞く良い機会>等から、【貴重な経験としての語り】、<大切にしている思いの明確化>、<新たな視点での気づき>、

<看護の深まり>等から、【看護の知の再発見】、<看護観のさらなる深まり>、<今後の看護への示唆>、<看護の語りの継続>等から、【今後の看護への期待】の3点でした。その他、実習指導者においては、【学生の成長への願い】【看護師としての満足感】【実践共同体としての価値共有】があげられ、【語ることへの戸惑い】がありました。学生においては、【実習指導者への尊敬】がありました。

【結論】

ユニフィケーションによる看護観カンファレンスの意義は、以下の3点でした。

1. 実習指導者と学生に共通していた意義は、【貴重な経験としての語り】【看護の知の再発見】【今後の看護への期待】でした。
2. 実習指導者にみられたものとしては、その他、【学生の成長への願い】【看護師としての満足感】【実践共同体としての価値共有】【語ることへの戸惑い】でした。
3. 学生にみられたものは、【実習指導者への尊敬】でした。



研修医レポート

臨床研修医

まえはら りょう
前原 遼



こんにちは。研修医1年目の前原遼と申します。東海大学医学部を卒業後、生まれ育った熊本へ戻り、今年の4月より熊本医療センターで初期研修をさせていただいております。早いもので、約7ヶ月の研修生活が過ぎました。親切な先生方、スタッフの方々に囲まれながら、充実した研修生活を送っております。

最初の研修科は腎臓内科でした。腎機能の評価から疾患の鑑別・治療計画まで幅広く考えることができました。また、透析患者様の電解質の補正や血圧コントロール、輸液管理など全身管理についても学びました。CV挿入など、どこの科にいても必要な手技を数多く経験できたことはとても良かったと思います。

次の研修科は救命救急部でした。当院は救急車受入台数が多く、多種多様な症例を経験することができます。

如何にして、緊急性の高い疾患を見逃さないようにするか、迅速に対応するかを学ぶことができたと思います。まだまだ分からないことも多く、自分の無力さに落ち込むことも多々ありますが、先生方のご指導を真摯に受け止め成長していければと思います。

次の研修科は呼吸器内科でした。肺炎を始め、肺がんや喘息、COPD、間質性肺炎など様々な症例を経験できました。苦しんでいる患者様を少しでも楽にさせてあげようと日々試行錯誤する毎日でした。その分、患者様に感謝されることも多く、有意義な研修を送れたと思います。

今は外科で研修させていただいております。多くの手術に入らせていただき、糸結びや縫合を始め、多くの手技を経験させていただけます。初めはなかなかうまくいかなかったことが、練習して臨床の場で出来るようになった時の喜びは格別です。

研修生活を始めて、あつという間の7ヶ月間でした。2年間の研修が終わった時に後悔が残らないよう、日々精進していきたいと思います。今後とも、ご指導ご鞭撻の程をよろしく願いいたします。

臨床研修医

まつむら かずき
松村 和季



私が研修医1年目にローテートする血液内科・呼吸器内科・外科・循環器科・麻酔科・消化器科はいずれも多くのスタッフ・専修医を抱え症例も豊富です。グループごとに大学なみの高度な専門治療が行われているながら、グループ間の風通しは大学よりはるかによく、広い範囲を非常に効率よく研修することができます。同じように多くの科を研修させるために1ヶ月ずつといったような小刻みなローテーションを組む病院もあるようですが、それは短すぎます。やはりひとつの科の研修には最低でも2ヶ月は必要だと思い、興味のある科や1年目で取れない科は2年目で取れます。当直は研修医2年目と1年目が2人と上級医が2人で当直

に臨みます。研修医の他に内科・外科・脳・循環器など他科の先生方の当直が1人ずつ必ず待機して下さっているので、研修医だけで判断に困るということはありません。来院時にはまず研修医だけで診るので力量も試されますが、責任が研修医だけにのしかかることは決してありません。電話1本でみなさんすぐにかけてくれます。当院は「断らない」救急を掲げており、そのため1次から3次の幅広い症例を経験でき、勉強になる症例に出会う頻度が多いと思います。当院の研修医は1学年16人と多いですが、スタッフ・専修医の先生の数も多く、上級医の先生の目が行き届かないということは決してありません。むしろ興味の向く先の異なる多くの同期がいることで、互いに自分の得意分野を教え合って成長していくことができます。また、紙から学ぶだけでなく患者さんから学ぶのが一番勉強になるということを多く経験しました。これからも一生懸命精進していきます。

研修のご案内

第47回 症状・疾患別シリーズ（会員制）

〔日本医師会生涯教育講座2.5単位認定〕

日時▶平成26年12月6日(土)15:00~17:30

場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

座長：魚返外科胃腸科医院

魚返英寛 先生

演題：「胸部X線で勝負する」～胸部CTはいつも撮れるとは限らない～

1. 胸部X線の正常像

熊本市医師会熊本地域医療センター腫瘍内科部長

柏原光介 先生

2. びまん性肺疾患

済生会熊本病院呼吸器科副部長

一門和哉 先生

3. 肺腫瘍

熊本中央病院化学療法室部長/呼吸器内科医長

牛島 淳 先生

この講座は有料で、年間10回を1シリーズ（年会費10,000円）として会費制で運営しています。但し、1回だけの参加を希望される場合は1回会費2,000円で参加いただけます。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター事務局

TEL 096-353-6501 (代表) 内線2630 096-353-3515 (直通) FAX 096-352-5025 (直通)

第191回 月曜会（無料）

（内科症例検討会）

〔日本医師会生涯教育講座1.5単位認定〕

日時▶平成26年12月15日(月)19:00~20:30

場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

1. 内科基礎講座

国立病院機構熊本医療センター呼吸器内科医長

名村 亮

2. 症例検討 「中大脳動脈解離による脳梗塞とくも膜下出血」

国立病院機構熊本医療センター神経内科

伊津野友紀

3. ミニレクチャー「診断困難な下血症例」

国立病院機構熊本医療センター消化器内科

持永崇恵

日頃、疑問の症例、興味のある症例、X線、心電図、その他がございましたら、ご持参いただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター統括診療部長 清川 哲志 TEL:096-353-6501(代表) FAX:096-325-2519

第159回 三木会（無料）

（糖尿病、脂質異常症、高血圧を語る会）

〔日本医師会生涯教育講座1.5単位認定〕

〔日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位<2群>0.5単位認定〕

日時▶平成26年12月18日(木)19:00~20:45

場所▶国立病院機構熊本医療センター研修室2

1. 「救急搬送された高齢の粘液水腫の一例」

国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科

江頭興一、山本紗友梨、堀尾香織、坂本和香奈、橋本章子、小野恵子、高橋毅、豊永哲至

2. 「新規経口血糖降下薬SGLT2阻害薬の特徴と問題点」

国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科

豊永哲至、堀尾香織、坂本和香奈、橋本章子、小野恵子、高橋毅

なお、興味のある症例、疑問・質問のある症例がございましたら、お持ちいただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科部長 豊永 哲至 TEL 096-353-6501 (代表) 内線5796



2014年 研修日程表 12月

国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

12月	研修センターホール	研 修 室
1日(月)		
2日(火)		
3日(水)		
4日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「外傷の初期治療」 国立病院機構熊本医療センター外科医長 松本克孝	
5日(金)		
6日(土)	15:00~17:30 第47回 症状・疾患別シリーズ 「胸部X線で勝負する」 ～胸部CTはいつも撮れるとは限らない～ [日本医師会生涯教育講座2.5単位認定] 座長 魚返外科胃腸科医長 魚返英寛 1. 胸部X線の正常像 熊本市医師会 熊本地域医療センター腫瘍内科部長 柏原光介 2. ひまん性肺疾患 済生会熊本病院呼吸器科副部長 一門和哉 3. 肺腫瘍 熊本中央病院化学療法室部長/呼吸器内科医長 牛島 淳	
7日(日)		
8日(月)		
9日(火)		
10日(水)		
11日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「傷の治療」 国立病院機構熊本医療センター形成外科部長 大島秀男 14:00~15:00 第21回 市民公開講座 「眼瞼下垂の治療」 国立病院機構熊本医療センター形成外科部長 大島秀男	
12日(金)		
13日(土)	13:00~15:30 第135回 公開看護セミナー 「『のさり』から見る老いの行方」 ～安心して老い病むことができるのか～ NPO法人 老いと病いの文化研究所われもこう理事長 熊本保健科学大学教授 竹熊千晶	
14日(日)		
15日(月)	19:00~20:30 第191回 月曜会 [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定]	
16日(火)		19:00~21:00 小児科火曜会(研1)
17日(水)		
18日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「耳鼻咽喉科の救急疾患」 国立病院機構熊本医療センター耳鼻咽喉科医長 上村尚樹	19:00~20:45 第159回 三木会(研2) (糖尿病、脂質異常症、高血圧を語る会) [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定] [日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位<2群>0.5単位認定]
19日(金)		
20日(土)	13:00~17:00 公開肝臓病教室 「もっと知りたい肝臓の話」	
21日(日)		
22日(月)		
23日(火)		
24日(水)		
25日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「摂食嚥下障害の評価と治療」 国立病院機構熊本医療センター歯科口腔外科部長 中島 健	
26日(金)		
27日(土)		
28日(日)		
29日(月)		
30日(火)		
31日(水)		

研1~3 2階研修室1~3

※二の丸モーニングセミナーにつきまして、詳細はホームページ (<http://www.nho-kumamoto.jp/>) をご参照ください。

問い合わせ先 〒860-0008 熊本市中央区二の丸1番5号 国立病院機構熊本医療センター2階 地域医療研修センター TEL 096-353-6501(代) 内線2630 096-353-3515(直通)